

自治研修あきた

No.67

発行 平成26年1月
発行者 秋田県自治研修所
TEL 018(873)7100

秋田県庁の女子力

秋田県自治研修所長 金田 早苗

「女性の活躍」が経済成長のカギを握るとして、最近「企業における女性の活用」や「女性リーダーを育てるには」などの話題が目立っています。また、県内でも、観光、農業、福祉など様々な分野の女性の活躍が地域の活性化に貢献しています。

さて、今年度の研修から県職員の女性の状況を見ると、新規採用職員研修では106人のうち35%が女性で、役付職員研修では136人のうち30%が女性でした。

一方、管理監督職員研修や課長級職員研修では、女性は各回わずか1人か2人という状況。管理的立場に女性が少ないのは、そもそもこの年代の女性の採用が少なかったことが理由の一つのこと。

派遣研修に目をむけると、自治大学校の第1部・第2部特別課程（3か月の通信教育と1か月間の宿泊による研修）への派遣のほか、今年度は6か月間の第1部課程に、はじめて女性が派遣されています。「はじめて」というのはちょっと驚きでしたが、これからどんどん後に続いて欲しいですね。

また、東北自治研修所が今年度から新たに始めた1か月間の主任級研修には、入庁3年目の女性が派遣されました。様々な自治体から参加したメンバーと共に学んだことをこれから大いに発揮してほしいと願っています。

研修を取り上げて、女性職員の状況を見ても、まだまだ偏りが見られますが、意欲的に学び、様々な分野に配置され経験を積んだ女性職員たちが、今後男性職員と同じように、班長・課長といった指導的立場についていくことは想像に難くありません。

女性は、相手の心に「共感する力」や協働の相手と対等に「つながる力」などが優れていると言われていています。また、育児や介護体験も強みとして、より実生活に即した施策につなげることも可能です。さらに、消費や観光などをはじめとして、どんな分野もその対象には女性の存在がありますから、女性の視点は欠かすことができないはずです。

実際の地域社会には、性別だけでなく、考え方や価値観の異なる様々な人々が暮らしており、ニーズも抱える問題も多様化しています。そのような社会で、これまで少数派であった女性職員たちには、「共感する力」や「つながる力」、女性ならではの視点を活かし、実生活に寄り添った問題解決を様々な主体と協働して実現させるなど、地域の活性化や県民の満足度の向上に一層貢献する活躍をしてほしいと願っています。

派遣研修レポート

県職員が受講する研修には、自治研修所が主催する研修の他、自治大学校や東北自治研修所が主催する研修への派遣もあります。期間は数日から長いものでは約半年というものまであります。今回は、比較的長期の派遣研修に参加した女性職員から、その内容や様子についてレポートをいただきました。

まずは、自治大学校「第1部・第2部特別課程」（通信研修：6～8月、宿泊研修：9月10日～10月3日）を受講した **宮野佳子さん（食肉衛生検査所）** のレポートです。

自治大学校研修

「第1部・第2部特別課程」

私が昨年の秋に行った自治大学校の第1部・第2部特別課程では、6月から8月までeラーニングによる「通信研修」と「2種類の事前課題」を作成し、9月から自治大学校での約1か月間の「宿泊研修」に臨みました。5月にオリエンテーションがあり、通信教育や課題作成の概要の他、グループ討議をする班の顔合わせがありました。研修生は、北は北海道から南は鹿児島まで、都道府県や市町の職員が108人、そのうち技術系職員は私を含め10人ほどおりました。男性ばかりの職場に勤務する私は、女性の多さと独特の雰囲気から秋からの研修に不安を抱きながら職場に戻ってきました。

eラーニングでは知らない用語や事務処理のため、繰り返し学習しなければなりませんでした。宿泊研修の講義が理解できる程度までになっていました。また、2種類の事前課題は、「期限に追われながら資料を集め、データを分析し、考えをまとめる」という学生のころのような焦りを味わいながら、メ切りの期限ギリギリまでレポートを書いていた。

自治大学校での宿泊研修が始まると、春の不安を感じる暇などないほど忙しく、そして研修生と楽しく過ごした日々でした。1日のスケジュールは、主に「講義」「それぞれの研修生が持ち寄った事前課題について小グループごとにレ

ポートを作成すること」「小グループが作成したレポートについてのグループ討議」でした。

講義は、「地方自治制度」「地方公務員制度」「地方税財政の課題」の他、「組織、行政の危機管理」や「地域福祉をめぐる課題と展望」など幅広い内容でした。どの講義も興味深く、講師の発する一言一言に、行政や住民サービスへの熱い思いを感じました。新しい知識が入ってくるのが嬉しく、講義はあっという間に過ぎていきました。

各自治体が持ち寄った事前課題には、「待機児童の実態」や「東日本大震災の被災地へ派遣している自治体の実情」などがあり、今まさに起きている課題に触れることができました。私は、課題の解決策を考え出すにあたり、その根拠となる関係法規を見いだせず、小グループの仲間から助言を求めながらレポートをまとめていきました。彼女らには大変迷惑をかけましたが、このことで短期間に仲良くなれたのではないかと感じています。

グループ討議では、各自治体の事例紹介や解決策について意見交換をしているうちに、自分の考えが変わり、新たに発言する場面が多々ありました。短期間で集中的に討議の訓練を行えたことは貴重な経験となりました。また、住民の要望をくみ上げ、政策形成につなげていく過程を経験することができました。

寄宿舎では、毎日のように各自治体から送ら

れてくる全国各地の名物・銘酒が披露され、研修生同士の親睦が図られていました。また、週末は誰かしらイベントを企画し、みんなで遠出をしました。とにかく研修生たちはパワフルでした。

日々の業務では経験できない時間を過ごせた1か月研修でした。今回学んだこと、感じたことを取り入れ、住民のためになる業務を進めていきたいと思います。



続いては、東北自治研修所「主任級職員研修」（7月1日～26日）を受講した **菊地美保子さん**（環境管理課）のレポートです。

東北自治研修所研修

「主任級職員研修」

はじめに、私は開講式の際、研修を無事に修了することができるかとても不安でした。しかし、閉講式では、研修を成し遂げた達成感と満足感を強く感じたことを覚えています。今回、この研修について伝える機会を与えてくださったことを大変嬉しく思います。限られたスペースではありますが、研修での成果について記載したいと思います。

この研修は、3つの基本科目、3つの演習科目、2つの講話から成っており、内容は地方自治法、政策法務、少子高齢問題、地域経済の活性化など地方公務員として必要な知識を習得する研修となっています。このうち、特に印象に残っている二つの科目をご紹介します。

まず、「政策法務」です。この科目では、講義で条例制定についての基本的な知識を学び、条例に関する判例を全員で研究します。その後、グループごとに一つの条例を立案します。私のグループでは「歩きスマホ禁止条例」という条

例を立案しました。立案した理由は、歩きながらスマートフォンを操作することが原因で発生する事故が増加しているため、規制の必要があると考えたからです。しかし、実際に条例を作成してみると、「歩きスマホ」とはスマートフォンを何秒間見た行為を指すのか、また条例の適用により県民の表現の自由を不当に規制することにならないかなどが問題となりました。条例の立案を通して、条例の趣旨、規制対象、規制手段、罰則の有無など、一つ一つの条文の必要性を考えました。そうすることで、条例の適用によって県民の権利を不当に規制することのないよう心がけました。我々行政の業務は、条例に基づいて県民の行為を規制することがあります。その際、行為を規制する目的、趣旨、程度などに配慮して条例を適用する必要性を感じました。

次に、「地域経済の活性化」です。この科目では、木村俊昭氏を講師に迎え、地域おこしに成功した事例を学んだ後、グループごとに地域経済の活性化のための政策を提案します。印象に残ったのは、地域経済の活性化のために「潜在的資源を活かす」ということです。地域おこしに成功した自治体は、地元の潜在的資源に新たな価値を見だし、地域経済の活性化の材料と

して活かしていました。例えば、新潟県の越後妻有で開催された「大地の芸術祭」では、空き家や廃校、棚田、里山という潜在的資源に文化交流の拠点という新たな価値を見いだしたことが発端となっています。私は、この科目を受講してから県内各地の潜在的な資源に目を向けるようになりました。目を向けてみると、発想を転換したり創造力を膨らませることで、もっと活用できそうな潜在的な資源が県内にたくさんあることに気づきます。

上述の科目は、どちらもグループワークによる演習科目であり、限られた時間内に一つの成果を出さなければなりません。グループワークは、誰かが意見を述べるのを待っていたのでは話合いが進みませんし、他方で自分の意見に固執するとスムーズな話合いを阻害してしまいます。各々が自分の意見を持ちながら他のメンバーの意見に耳を傾け、最終的にグループとしての成果をどの方向にもっていくかということを決めなければなりません。グループワークを通して、一人一人が主体となり、積極性と協調性を持ちながら作業を進めることの重要性を感じました。

さらに、研修を通して東北の各自治体につながりができたことが私にとって大きな収穫となりました。この研修の受講者は、おおよそ25歳から35歳までの若手職員28人でした。受講者が同じ年代であることから、職場での悩み

や抱えている課題に共感することが多く、自分の経験を話したり助言を受けたりすることができました。また、他の受講者の仕事に対する熱意や将来地元をこうしていきたいという展望も聞くことができ、刺激を受けることができました。この研修が第1回であったため、自分たちでこの研修を作り上げ、成功させようという気持ちが受講者全員にあったように思います。そのため、研修全体を通して、受講者が切磋琢磨し、自然に団結感が生まれていました。グループワークでは、意見がまとまらず時間内に成果を出すことが厳しい状況に追い込まれることもありましたが、そうした苦しい時間をもともに乗り越えたことも、団結感をいっそう強くしたのだと感じます。

この研修で出会った受講者とは現在でも交流があり、定期的に会うことで情報交換をすることにしています。仲間に出会えたことこそが、研修の最大の成果だったように思います。



▽編集後記

今回は、「研修から見た女性の活躍」に焦点を当てて構成しました。積極的に研修を受講し能力を高め、学んだ内容を業務に活かして、職場の「女子力」向上に努めてほしいと思いました。

もちろん、女性だけでなく男性のみなさんも、自己の能力開発をすることにより職場全体の生産性を上げるよう、積極的な研修の受講を期待しております。研修所としても、魅力的な研修を企画して、皆様のお越しをお待ちしております。 【教務班 千田】